

明倫短期大学学会報告

月例研究会抄録

平成21年度明倫短期大学学会月例研究会は、平成21年4月23日の第37回から10月22日の第42回まで計6回開催された。7年に及ぶ42回の研究会における総演題数は79に上った(通算回数は前身の明倫短期大学研究会からのカウント)。歴年の演題名等は学会HPをご参照下さい。

第37回(通算第120回):2009年4月23日(木)

(座長:本間和代)

実社会で経験したこと

大沼誉英(歯科技工士学科)

歯科技工の社会において歯科補綴装置を製作する際に求められる精度は、歯科技工学校で習得するレベルよりはるかに高く、就職した直後はそのギャップに戸惑うことがある。

実社会では常に実体顕微鏡を使っている作業が行われており、全部鑄造冠の適合性と鑄造性の問題点が肉眼レベルで確認できないものであっても許されるものはなかった。それらの問題点はワックスパターンの厚み不足により発生する金属の鑄込み不足や、鑄造の際の溶解温度によるものなど単純な要因であり、より注意力を持てば解決できる程度のものであった。

教員となった今、歯科技工士学科卒業後の8年間に実社会で経験を積み、通用した技術を教育現場で生かし、社会に出てから経験するギャップを少しでも小さくして即戦力となる歯科技工士の学生教育に役立てていきたい。また、今後も鑄造の研究を通じて自分のテクニックも向上させ更なる鑄造性と適合性の向上について追及していきたい。

日常生活下での糖質水溶液含嗽にともなう歯表面のpH変動

小黒章(歯科衛生士学科)

歯表面には食事・喫食の度、常在微生物叢による食餌糖基質の代謝/発酵により乳酸を主とする有機酸が産生される。それによる歯表面のpH低下は歯質ヒドロキシアパタイトないし磷酸カルシウムの溶出(脱灰)を誘発するが、pHの上昇とともに脱灰は修復(再石灰化)され、齲蝕発症はこの絶え間ない脱灰-再石灰化の傾きに依存する。実験的条件下でステファン曲線に

関わる主要因子は歯垢のaging, 唾液流量, 唾液酸緩衝能, さらには、唾液ないし歯垢の $[Ca^{2+}]$, $[P_i]$ などとされる。実験的条件すなわち歯垢のagingとは3~4日間、歯磨きをしないことを指すが、齲蝕は日常生活から起こるのであり、その際の歯表面のpH変化と齲蝕活動性/齲蝕経験の関わりには不明部分が多い。5種の10%糖質水溶液による含嗽時の歯表面(口腔内6箇所)pH変化測定ではpH5.7以下を示した箇所(率)は、蔗糖0.46, ぶどう糖0.31, 麦芽糖0.15, であり、キシリトール, ソルビトールによるpH低下は観察されなかった。このpH降下には速効(5分)型と遅延(10分)型が認められ、pHがどの部位で降下するのは予測できない。

第38回(通算第121回):2009年5月27日(水)

(座長:木暮ミカ)

歯科保健指導学習への動機づけ

小野真奈美(歯科衛生士学科)

歯科衛生士業務の一つである「歯科保健指導」を行うには、専門的知識・技術, 問題発見の解決能力, コミュニケーション能力など総合力が必要となる。そこで歯科保健指導関連5科目に興味をもたせ、学習意欲の向上を図ることを目的に歯科衛生士学科1・2年生を対象に「家族の口腔内観察体験」を実施し、到達目標についての自己評価と感想を集計、分析した。

両学年とも身近な人の口腔内を観察し、様々な年代の口腔内状況を把握することで歯や口腔に関心をもつ良い機会となった。また、家族の口腔環境を良い方向へ導きたい、もっと歯科保健指導ができるようになりたいなど歯科保健指導科目への動機づけに繋がったと思われる。さらに、自己評価によって、日頃の実習の到達度を自覚することができ今後の目標設定にも役立つと考えられる。

今後も学習進度に合わせ、家族の口腔に関心を持ち、継続した歯科保健指導・口腔管理を実施していきたい。

歯科技工士教員として専攻科の活動を振り返って

丸山満(歯科技工士学科)

生体技工専攻科は総合力の高い歯科技工士を育成するために、平成11年4月に開設された。入学生は今年度が7名と増加傾向にあり、29名の修了生(8回生)を輩出してきた。